



陸で会う佐藤さんはいつもおおらかで、優しい。

佐藤さんによると、彼の船は「女性は船に乗せられない」と決められており、天様という船の神様が女性なので、女性が乗ると嫉妬をするからだといわれている。「船室から一歩も出ないと約束するので」と頼み込んだが、港に停泊する船を見てすっかり尻込みしてしまった。佐藤さんの船は、「沖合底曳き網漁」という漁法で、片道2時間以上かかるボイントまで行き、巨大な網を引きずつて魚を獲る。船の後方には、腕の太さほどもあるうかとういうロープが二巻積み込んである。巻き込まれたら一巻の終わりだ。デッキには網とカゴが所狭しと置かれ、揺れる船上で身動きを取れるスペースはほとんどない。1月9日の昼、「明日の朝3時に出港する」と連絡が入った。男性力メラマンだけでも乗船させてもらおう予定だったが、年明けに襲来した低気圧の影響が残っているので

佐藤さん（49）によると、彼の船は「女性は船に乗せられない」と決められており、天様という船の神様が女性なので、女性が乗ると嫉妬をするからだといわれている。「船室から一歩も出ないと約束するので」と頼み込んだが、港に停泊する船を見てすっかり尻込みしてしまった。佐藤さんの船は、「沖合底曳き網漁」という漁法で、片道2時間以上かかるボイントまで行き、巨大な網を引きずつて魚を獲る。船の後方には、腕の太さほどもあるうかとういうロープが二巻積み込んである。巻き込まれたら一巻の終わりだ。デッキには網とカゴが所狭しと置かれ、揺れる船上で身動きを取れるスペースはほとんどない。1月9日の昼、「明日の朝3時に出港する」と連絡が入った。男性力

メラマンだけでも乗船させてもらおう予定だったが、年明けに襲来した低気圧の影響が残っているので

女人禁制の海へ

危険だと断られてしまった。

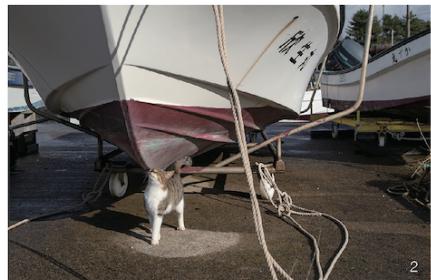
午前2時。真っ暗な港の中で、オレンジ色の街灯に照らされた松宝丸は静かに揺れていた。船ではすでに腰の曲がった一人の乗組員が作業をしていた。老人は片足がうまく曲がらないのか、トコトコとゆっくり動いている。2時25分、軽トラックが勢いよく滑り込んできた。出てきた佐藤さんは一瞬こ

ちらに目をやり、「おはよう」と短く言つただけで、眉間に見る顔とはまつたく別人だった。目尻の笑い皺が消え、目はキリリとつり上がっている。普段は饒舌だが、私たちのわからない短い言葉で乗組員に指示を出すだけだ。今日の波の予報は1m、風もビタリと止んでいる。最後の望みをかけてカメラマンは乗船できる準備をしてい

たが、とても話しかけられるような雰囲気ではなかつた。2時34分、もう一人の乗組員が車に乗つて現れた。身のこなしは軽やかだが、帽子からのぞく髪には白髪が混じつている。車やトラック、自転



1.金浦で300年以上続く掛け魚(かけよ)祭り。(写真提供:にかほ市観光協会) 2.金浦港にはまるまる太った猫が多い。漁師たちが餌付けをしているのだとか。3.元文2年(1737)の海難者76名を供養した石仏



2

毎年2月4日、竹竿に吊るした巨大なタラを担いだ船乗りたちが、港から神社までの道のりを練り歩く。彼らは待ち受けの神社では、船頭たちが祈禱を受ける。「掛けよ」まつり」とよばれるこの奇祭は、300年以上前からここ、金浦（このうら）で行われてきた。奉納したタラは、消防や警察など漁師が海に出て不在の間に家族を守っている人たちに振る舞われる。冬の日本海は荒い。海岸線の松の木はビュウビュウと吹き付ける風に耐えるよう斜めに這いつくばり、丘の上に立ち並ぶ風車は羽根が飛んでしまいそうなほど回っている。港を臨む小高い山には地蔵様とよばれる3体の石仏が鎮座している。それぞれが嵐で多数の海難者が出したときの供養として建てられた。手漕ぎの木造船は動力付きの強化プラスチック船へと進化したが、今でもシケがひどい冬には1ヶ月に4回ほどしか出漁できないこともあります。